

## 跡見花蹊略歴

花蹊自身がまとめた二種類の略歴を日記に先立ち巻頭に収める。上段は「花蹊日記第八号」、下段は「花蹊日記第九号」を配し、対照できるようにした。

『花蹊日記第八号』は、現在所在不明。日記編纂事業のために行った写真撮影時（昭和五十六年十一月）には存在しており、今回の翻訳はその写真焼付けによって行った。また、原本からの電子複写および『跡見開学百年』（昭和五十年十月二十一日、跡見学園）中の「花蹊日記解題」に基づいて書誌を記す。洋綴じ、横野入り市販ノート。黒色総クロス表紙。全三十ページ、うち墨付き二十七ページ。墨書縦書き。一ページ十二行×十五行。内容は、天保十一年の誕生より、明治六年十二月二十四日までを記す。

『花蹊日記第九号』は、朱刷りの原稿箋（一丁二十字×十六行の朱枠、龍頭欄付き、小口に「翰墨林 成蹊山館」と刷る。）を袋綴じにして唐本表紙を付けたもの。縦二十三・三 cm×横十三・三 cm。（縦は右端、横は上端を計測、以下同）康熙綴じ。全三十八丁、うち墨付き十五丁半。墨書。朱筆、鉛筆、および赤ペンによる、花蹊自筆の訂正・注記あり。表紙右肩に「天保十一年より／明治十八年一月に至る」と記す。内容は、天保十一年の誕生より、明治八年一月八日までを記す。明治二十七年および明治四十五年の法帖関係の記述は、後年の書き足し。

文久元年 辛酉（一八六一年

一八六二年十二月二日より） 花蹊二十二歳

『花蹊日記第一号』を収める。

縦二十三 cm×横十五・九 cm。一丁十八行の墨刷り罫線の原稿箋を袋綴じにしたもの。共紙表紙。表紙は特に共紙を二重に重ねてある。二ヶ所の紙縫り仮綴じ、本文全十六丁、本文前に白紙の遊び一丁。墨書。記載は、原稿箋全丁および裏表紙見返しまで。表紙に「戊午／早春／文久元年辛酉／四月廿一日より／同十二月まで 第一号／吟草／花蹊」、裏表紙右下に「槐齋」と記す。本文冒頭は「文久元年辛酉首夏」と記し、文久元年四月二十一日の記事で始まり、同年十二月二日までを記述する。

『をりく艸』（大正四年、実業之日本社）によれば、日記は安政元年から存在していたことが分かる。しかし、現在は文久元年四月二十一日からしか残されていない。偶々、文久元年正月元日の記事が『をりく艸』に収められている。

文久二年 壬戌（一八六二年

一八六三年十一月十二日より） 閏八月あり 花蹊二十三歳

『花蹊日記 第二号』のうち、文久二年分（二丁表～二十五丁表）を収める。記事は、五月十六日より始まり、十二月二十九日までを記述する。

『花蹊日記 第二号』全体の書誌を記す。縦二十四cm×横十六cm。和紙袋綴じ。共紙表紙。二ヶ所の紙縫り仮綴じ。本文全三十五丁。墨書。半丁、十五行～二十五行。表紙に「文久二壬戌／五月仲夏日／第二号／日々比嘉栄（ひかえ）／四冊目／花蹊」と記す。

文久三年 癸亥（一八六三年）

一八六四年十一月二十二日より） 花蹊二十四歳

『花蹊日記 第二号』のうち、文久三年一月一日より四月十六日まで（二十五丁表より三五丁裏）および『花蹊日記 第三号』のうち、文久三年四月十七日より十二月三十日まで（一丁表より二十一丁表）を併せ収める。文久三年の冒頭は、「文久二／癸亥正月朔日」で始まる。また、『花蹊日記 第三号』の冒頭は、「文久二／癸亥四月十七日」から始まる。「文久二」は、共に「文久三」の誤りである。

『花蹊日記 第二号』の書誌は、「文久二年」の項参照。

『花蹊日記 第三号』全体の書誌を記す。縦十三・六cm×横十九・五cm。和紙袋綴じ。共紙表紙。一ヶ所の紙縫り仮綴じ。本文全九十二丁。裏表紙前に遊紙一丁。墨書。半丁、十八行～四十四行。表紙に「文久二年癸亥四月十七日より／同三年元治元年慶応三年四月廿七日迄／他見不許／第三号／日家栄（ひかえ）／迹見花蹊蔵」と横長方向を縦にして記す。

文久四年

甲子（一八六四年）

元治元年 二月二十日改元 一八六五年十二月四日より） 花蹊二十五歳

『花蹊日記 第三号』のうち、文久四年一月一日より元治元年十二月二十九日まで（二十一丁表より四十四丁表）を収める。文久四年の冒頭は、「文久四年甲子元日」で始まる。

『花蹊日記 第三号』の書誌は、「文久三年」の項参照。

元治二年

乙丑（一八六五年）

慶応元年 四月七日改元 一八六六年十一月十五日より） 閏五月あり 花蹊二六歳

『花蹊日記 第三号』のうち、元治二年一月一日より慶応元年十二月二十六日まで（四十四丁表より六十二丁表）を収める。元治二年の冒頭は、「文久三年乙丑朔日」で始まる。「文久

三年」は、「元治二年」の誤りである。

【花蹊日記第三号】の書誌は、「文久三年」の項参照。

本日記では、月のつごもりの表記を、おおむね小の月は「廿九日」、大の月は「晦日」としている。慶応元年九月は小の月であるにも関わらず、「廿九日」の後に「晦日」が立項されている（廿九日は記事なし）。九月「晦日」は、「廿九日」の誤りと考え、「晦日」の記事は、「廿九日」分として処理した。

慶応二年 丙寅（一八六六年）

一八六七年十一月二十六日より） 花蹊二十七歳

【花蹊日記第三号】のうち、慶応二年一月一日より十二月二十五日まで（六十二丁表最終行より六十八丁表）を収める。慶応二年の冒頭は、「慶応二丙寅正月元日」で始まる。

【花蹊日記第三号】の書誌は、「文久三年」の項参照。

慶応三年 丁卯（一八六七年）

一八六八年十二月七日より） 花蹊二十八歳

【花蹊日記第三号】のうち、慶応三年一月一日より十二月三十日まで（六十八丁表より八十五丁表）を収める。慶応三年の冒頭は、「慶応丁卯元日」で始まる。

【花蹊日記第三号】の書誌は、「文久三年」の項参照。

慶応四年

戊辰（一八六八年）

明治元年 九月八日改元 一八六九年十一月九日より） 閏四月あり 花蹊二十九歳

【花蹊日記第三号】のうち、慶応四年一月一日より閏四月二十七日まで（八十五丁表より九十二丁表）および【花蹊日記第四号】五月五日より（明治元年）十二月二十九日（一丁表より九丁表）を併せ収める。慶応四年の冒頭は、「慶応／戊辰正月元日 晴 戊」で始まる。また【花蹊日記第四号】の冒頭は、「戊辰夏五月端午日 丁丑（辛巳）雨」で始まる。「丁丑」は「辛巳」の誤り。

【花蹊日記第三号】の書誌は、「文久三年」の項参照。

【花蹊日記第四号】全体の書誌を記す。縦十四cm×横二十・三cm。和紙袋綴じ。共紙表紙。

表紙の上にさらに半切り共紙を載せ一ヶ所の紙縫り仮綴じ、半切り共紙を裏に折り返して紙縫り目を隠し、共紙裏表紙に糊付けする。全四十四丁、うち墨付き二十八丁。墨書。半丁、

二十七行〜四十四行。表紙に「慶応三年戊辰／五月端午日より／明治四年辛未／八月廿一日まで／第四号／日記」と記す。裏表紙には、天地逆に牡丹の絵を描く。

明治二年 己巳（一八六九年）

一八七〇年十一月三十日より） 花蹊三十歳

〔花蹊日記 第四号〕のうち、明治二年一月一日より十二月二十九日まで（九丁表より十六丁裏）を収める。明治二年の冒頭は、「明治記二己巳正月元日晴」で始まる。

〔花蹊日記 第四号〕の書誌は、「慶応四年」の項参照。

明治三年 庚午（一八七〇年）

一八七一年十一月十一日より） 閏十月あり 花蹊三十一歳

〔花蹊日記 第四号〕のうち、明治三年一月一日より十二月二十九日まで（十六丁裏より二十七丁裏）を収める。明治三年の冒頭は、「明治庚午之正月元日晴」で始まる。

〔花蹊日記 第四号〕の書誌は、「慶応四年」の項参照。

明治四年 辛未（一八七一年）

一八七二年十一月二十一日より） 花蹊三十二歳

〔花蹊日記 第四号〕のうち、明治四年一月一日より八月二十一日（二十七丁裏より三十八丁表）および〔花蹊日記 第五号〕明治四年八月二十四日より十二月三十日まで（一丁表より五丁裏）を併せ収める。明治四年の冒頭は、「明治四辛未春元日晴」で始まる。また〔花蹊日記 第五号〕の冒頭は、「八月廿四日雨」で始まる。

〔花蹊日記 第四号〕の書誌は、「慶応四年」の項参照。

〔花蹊日記 第五号〕全体の書誌を記す。縦十四cm×横二十・三cm。和紙袋綴じ。共紙表紙。一ヶ所の紙縫り仮綴じ。本文全十四丁。墨書。半丁、三十行〜三十六行。表紙に「明治四年／辛未八月廿四日より／同五年壬申／十月三十日まで／第五号」と記す。

明治五年 壬申（一八七二年十二月二日まで） 花蹊三十三歳

〔花蹊日記 第五号〕のうち、明治五年一月一日より十月三十日まで（五丁裏より十四丁表）

および「花蹊日記第六号」明治五年十一月一日より十二月二日まで（二丁表より二丁裏）を併せ収める。明治五年の冒頭は、「明治五壬申之春 正月元日晴」で始まる。また「花蹊日記第六号」の冒頭は、「明治五年壬申之十一月朔日晴」で始まる。

「花蹊日記第五号」の書誌は、「明治四年」の項参照。

「花蹊日記第六号」全体の書誌を記す。縦十三・九cm×横十九・七cm。和紙袋綴じ。共紙表紙。二ヶ所の紙縫り仮綴じ。本文全十八丁。墨書。半丁、二十七行／三十九行。表紙に「明治五年／壬申十一月一日より／同六年癸酉／十一月十五日まで／第六号／木の花」と記す。

明治六年 癸酉（一八七三年）

太陽曆採用

花蹊三十四歳

明治五年十二月三日を太陽曆明治六年一月一日と改める。

「花蹊日記第六号」のうち、明治六年一月一日より十一月十五日まで（二丁裏より十八丁裏）および「花蹊日記第七号」明治六年十一月十六日より十二月三十一日まで（二丁表より四丁表）を併せ収める。明治六年の冒頭は、「三日晴／此日ヲ明治六癸酉年一月一日ト相改候」で始まる。また「花蹊日記第七号」の冒頭は、「十一月十六日晴天」で始まる。

「花蹊日記第六号」の書誌は、「明治五年」の項参照。

「花蹊日記第七号」全体の書誌を記す。縦十四cm×横二十・四cm。和紙祝儀折り仮綴じ。共紙表紙。一ヶ所の紙縫り仮綴じ。全四十六丁、うち墨付き三十丁。墨書。一部ペン書き。半丁、八行／三十六行。表紙に「日々／雑記／第七号／明治六年癸酉之秋／十一月十六日／同八年九月七日まで」、裏表紙右下に「不言菴」と記す。

明治七年 甲戌（一八七四年）

花蹊三十五歳

「花蹊日記第七号」のうち、明治七年一月一日より十二月二十五日まで（四丁表より二丁一丁裏）を収める。明治七年の冒頭は、「明治七年／紀元二千五百三十四年第一月一日」で始まる。

「花蹊日記第七号」の書誌は、「明治六年」の項参照。

明治八年 乙亥（一八七五年）

花蹊三十六歳

「花蹊日記第七号」のうち、明治八年一月一日より九月七日まで（二十一丁裏より三十丁裏）を収める。明治八年の冒頭は、「明治八年一月一日晴天」で始まる。

「花蹊日記第七号」の書誌は、「明治六年」の項参照。

明治九年 丙子（一八七六年）  
明治十七年 甲申（一八八四年）

花蹊三十七歳〜四十五歳

明治九年から明治十七年までの日記は残されていない。よって、「花蹊日記第十号」より、当該年度の記事を抜粋して掲出する。なお、当該年度の動向を窺うには、あまりにも記事が少ないため、参考として、花蹊の弟愛四郎のものと思われる、明治十一年二月の日記を「雑記」より抜粋併出した。上段に「花蹊日記第十号」下段に「雑記」を配した。

「花蹊日記第十号」全体の書誌を記す。「横山二 光堂製」原稿箋（一丁二十四行の藍刷り）を袋綴じにして翁格子風の渋線刷き表紙を付けたもの。縦二十三・七cm×横十六・二cm。小口裂当て四つ目綴じ。見返しにアニリン系の赤紙を使用。全四十丁、うち墨付き十五丁。墨書。朱筆による、花蹊自筆の書き入れ・合点・句点等あり。表紙右肩に墨書で「明治十一年より」、さらに改行の上、朱のペン書きで「廿一年小石川開校式まで」と記す。内容は、明治十一年二月一日より、明治二十一年一月十三日までの抄記である。このうち、明治十年、十一年に相当する記事（二丁表）を掲出する。明治十一年の記事は、「明治十一年二月一日より」で始まる。

「雑記」の書誌を記す。一丁十六行の藍刷り原稿箋を袋綴じにして、唐本表紙を付けたもの。縦二十二・八cm×横十五・六cm。小口裂当て四つ目綴じ。全四十八丁。全丁墨付き。墨筆、紫筆、朱筆および鉛筆の交じり書き。表紙左肩に「雑記」、右下に「和慶」と墨書。一丁表冒頭に「華蹊」（陰刻朱文長方形印、縦一・二cm×横〇・七cm）を二顆、関防風に捺印。内容は、愛四郎のものと思われる明治十一年二月一日より二月十日までの日記、および花蹊筆の明治十一年春より明治十七年春までの揮毫、作詩等の草稿および身辺雑記の控え。このうち、日記形式を持つ、明治十一年二月一日より二月十日までの記事（二丁表より三丁表）を参考として抜粋掲出する。冒頭は、「明治十一年二月一日ヨリ」で始まる。

本「雑記」は、弟愛四郎が書きさせた日記控えを花蹊が譲り受け、引き続き雑記帳として使用したものである。

明治十八年 乙酉（一八八五年） 花蹊四十六歳

明治十八年の内容を持つ二種類の日記を上下二段に配し、対照できるようにした。上段は、「花蹊日記第十号」のうち、明治十八年七月二十六日より十二月十一日まで（二丁表より三丁裏）、下段は、「花蹊日記第十一号」のうち明治十八年七月二十日より十二月三十一日まで（二丁表より四十五丁表）を収めた。なお、「花蹊日記第十号」の「明治十七年」となっているものは、内容からすべて明治十八年のものと判断し、当該位置に組み込んだ。「花蹊

日記第十一号」の冒頭は、「成蹊館日乗巻一 不言主人初稿／明治十八載歲次乙酉七月廿日月曜 雨又晴」の記述で始まる。

〔花蹊日記第十号〕の書誌は、「明治九年／明治十七年」の項参照。

〔花蹊日記第十一号〕全体の書誌を記す。「翰墨林 成蹊山館」原稿箋（一丁二十字×十六行の朱枠、龍頭欄付き）全五十丁の最初と最後に白紙を加えて袋綴じにし、唐本表紙を付けたもの。最初の白紙一丁の表に「成蹊館日記」と記して、内扉とする。体裁は、「花蹊日記第九号」（「花蹊日記略歴」の項参照）に同じ。縦二十三・三cm×横十三・三cm。康熙綴じ。墨書。表紙右肩に「明治十八年乙酉七月廿日より／同十九年丙戌廿五日迄」と記す。漢文体日記。

明治十九年 丙戌（一八八六年） 花蹊四十七歳

明治十九年の内容を持つ五種類の日記を上下二段に配し、対照できるようにした。

上段は、「花蹊日記第十号」のうち、明治十九年一月一日より十二月まで（四丁表より八丁裏）、および「花蹊日記第十二号」のうち、明治十九年五月九日より十四日までの下総紀行別紙を収める。

下段は、「花蹊日記第十一号」のうち、明治十九年一月一日より一月二十五日まで（四十五丁表より五十丁裏）、および「花蹊日記第十二号」のうち、明治十九年三月二十日より八月三十日まで（一丁表より二十八丁裏）、および「花蹊日記第十三号」のうち、明治十九年八月三十一日より十二月三十一日まで（一丁表より二十六丁表）を収める。

〔花蹊日記第十一号〕明治十九年一月一日は、「明治十九年丙戌一月一日西 金曜 晴」の記述で始まる。また「花蹊日記第十二号」の冒頭は、「明治十九年丙戌三月二十日 土曜 晴 風 卯」の記述で始まる。また「花蹊日記第十三号」の冒頭は、「成蹊館日乗巻三／明治十九年丙戌八月三十一日 火曜 晴」の記述で始まる。

〔花蹊日記第十号〕の書誌は、「明治九年／明治十七年」の項参照。

〔花蹊日記第十一号〕の書誌は、「明治十八年」の項参照。

〔花蹊日記第十二号〕全体の書誌を記す。一丁二十四行の朱刷りの原稿箋を袋綴じにし、布目および二重網模様に花の丸の空刷りのある栗色表紙を付けたもの。縦二十一・七cm×横十五・四cm。小口裂当て四つ目綴じ。全五十丁、うち墨付き四十五丁。墨書。朱筆による書き入れ・訂正・句点等の推敲あり。内容は、明治十九年三月二十日より十二月三十一日までの漢文体日記草稿。冊中に三丁分の別紙挿入あり。体裁は、「翰墨林 成蹊山館」原稿箋（一丁二十字×十六行の朱枠、龍頭欄付き）紙縫り仮綴じ。墨書。朱筆による書き入れ・訂正・句点等の推敲あり。内容は、明治十九年五月九日より十四日までの漢文体下総紀行。

〔花蹊日記第十三号〕全体の書誌を記す。「翰墨林 成蹊山館」原稿箋（一丁二十字×十六行の朱枠、龍頭欄付き）全五十丁の最初と最後に白紙を加えて袋綴じにし、唐本表紙を付け

たもの。体裁は、「花蹊日記第九号」（「花蹊日記略歴」の項参照）および「花蹊日記第十一号」に同じ。縦二三・三cm×横十三・三cm。康熙綴じ。墨書。朱筆による書き入れ・訂正・句点等あり。表紙右肩に「明治十九年丙戌八月三十一日より／同十二月三十一日迄」と記す。漢文体日記。

明治二十年 丁亥（一八八七年） 花蹊四十八歳

「花蹊日記第十号」のうち、明治二十年一月一日より十二月二十八日まで（八丁裏より十三丁裏）を収める。明治二十年の記事は、「明治廿年丁亥一月一日より」で始まる。

「花蹊日記第十号」の書誌は、第一巻「明治九年〜明治十七年」の項参照。

なお、この年の漢文体日記がかつて存在したことが『花の下みち』（大正八年、実業之日本社）によつてわかるが、現在は残されていない。

明治二十一年 戊子（一八八八年） 花蹊四十九歳

「花蹊日記第十号」のうち、明治二十一年一月一日より二月まで（十三丁裏より十五丁裏）を収める。一月八日の欄外に「此分ハ重複に相成候」、また一月八日の式次第の第二「三条内大臣祝文御朗誦」の下に「此分未見当らず」と朱筆で覚書きを記すが、この朱筆の記述は省略した。

なお、この年の漢文体日記がかつて存在したことが『花の下みち』によつてわかるが、現在は残されていない。

「花蹊日記第十号」の書誌は、第一巻「明治九年〜明治十七年」の項参照。

明治二十二年 己丑（一八八九年） 花蹊五十歳

「花蹊日記第十四号」に記載される明治二十二年八月二十一日より十二月十三日まで（一丁表より六丁裏）を収める。

「花蹊日記第十四号」全体の書誌を記す。「翰墨林 成蹊山館」原稿箋（一丁二十字×十六行の朱枠、龍頭欄付き）全四十九丁の最初と最後に白紙を加えて袋綴じにし、唐本表紙を付けたもの。体裁は、「花蹊日記第九号」（第一巻「跡見花蹊略歴」の項参照）、「花蹊日記第十一号」および「花蹊日記第十三号」に同じ。縦二三・三cm×横十三・三cm。康熙綴じ。墨書。表紙右肩に「明治廿二年己丑八月廿一日より／同九月十二日迄／不言菴詩稿」と記す。「同九月十二日迄」は、「明治廿三年九月十二日迄」とあるべきところ。「同」の下に「廿三



年」と後年、鉛筆による整理のための書込みあり。

明治二十三年 庚寅（一八九〇年） 花蹊五十二歳

〔花蹊日記 第十四号〕に記載される明治二十三年一月一日より九月十二日まで（六丁裏より十二丁裏）を収める。

〔花蹊日記 第十四号〕の書誌は、「明治二十二年」の項参照。

明治二十四年 辛卯（一八九一年） 花蹊五十二歳

明治二十四年の日記は残されていない。